

## 海外メンタルヘルスの現場からⅡ

### (47) パワハラという印籠

シンガポール日本人会クリニック

医師 日暮 真由美

シンガポール日本人会の会誌に「パワハラの加害者にならないために」という記事を書いたら、今回は反響が早かった。ハラスメントを受けた経験のある人からは、読んで胸がすく気持ちになったという感想が多かったが、一方、自分はひよっとしたら加害者だと周囲に思われているかもしれないというコメントや、あるいは、すでに加害者になっていると思うと自分を省みる人からの感想もあった。

昔に比べると今は、立場が上の人の権力のふりかざしに対して、「それはパワハラです」と下の人も対抗できるようになり、ずいぶん大きな進歩である。パワハラだけでなく、セクハラ、モラハラを始めとして色々な理不尽なことがハラスメントとして呼称されるようになり、今まで泣き寝入りするしかなかった人達も少しは希望を持てるような時代になった。しかし、昨今、「それはパワハラです」と突きつける印籠の力が広く認知されるに従い、一部では適切でない印籠の使われ方がされてしまうこともある。

駐在員の A さんは部下の B さんからの相談があまりにも多いことに疲れ切っていた。日本人が二人しかいない職場なので、最初はコミュニケーションをはかろうと何でも相談にのっていたが、そのうち B さんの相談内容が明らかな苦情に変わってきた。B さんは自分の仕事や会社への不満が多く、自分の仕事が大変なのは A さんの上司としての采配が悪いからだと言った。そのような状態を放置しているのは A さんによる B さんへの一種のパワハラだとまで言った。A さんはとても温厚な人柄で、パワハラとは無縁の性格であったが、身に覚えが全くなくても、パワハラと言われたことによりかなり動揺した。以後、B さんに「話があります」と言われてつかまると、下手に話を切り上げてはまずいと思い、タイミングをはかっているうちに、つい何時間も話し込まれてしまうようになった。B さんの言動に怯える気持ちが日々強くなり、眠れなくなった。A さんは親友に悩みを打ち明けたところ、親友は B さんの言動はモラハラではないかと指摘した。

パワハラと言われることをとても恐れ、言動が委縮してしまう人が増えてきているのかもしれない。

(症例は本人の同意を得、また内容は個人が特定されないよう変更を加えています)